国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　8月24日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程

氏　　名　　高田　琢弘

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	25th National Conference on Problem Gambling 第25回問題的ギャンブル学会
公式ホームページURL	http:www.ncpgambling.org/conference
開　催　期　間	2011年　6月　30日　～　2011年　7月　2日
旅　行　期　間	2011年　6月　29日　～　2011年　7月　4日 （旅行期間が申請書より1日長くなっている）
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Park Plaza Hotel Towers, Boston, MA, The United States of America （アメリカ合衆国，マサチューセッツ州ボストン，パークプラザホテル）
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	高田琢弘　筑波大学大学院人間総合科学研究科 湯川進太郎　筑波大学大学院人間総合科学研究科・心理学系
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Effects of affect and perceived luck on reckless gambling behavior （感情および運の知覚が無謀なギャンブル行動に及ぼす影響）
補　助　金　額	100000円（内訳　航空券代125550円の一部 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は，申請者の発表に対し，国際会議等参加旅費補助金をいただきまして，心より感謝申し上げます。以下，当学会での活動内容，並びにその成果を報告させていただきます。

【活動内容】

2011年6月30日から7月2日にかけて，アメリカのボストンで開催された，25th National Conference on Problem Gamblingにおいて，ポスター発表を行った。申請者の発表日時は，7月1日（金）の11:00～11:30であり（Student Poster Session），発表題目は“Effects of affect and perceived luck on reckless gambling behavior”（日本語題目：感情および運の知覚が無謀なギャンブル行動に及ぼす影響）であった。本学会（NCPG）は，アメリカにおけるギャンブル関係の学会では，最も長い歴史を持つ学会であり，今回も数百名が参加した大規模なものであった。参加者の大半はアメリカ人であったような印象を受けたが，メキシコやシンガポール，アジア圏からの参加者も見受けられた。また，今回の本学会の大会テーマは，“Revolutionary Changes and Emerging Innovations”であり，それに関連した研究発表が行われていた。

【成果】

1. 自身の研究発表

申請者の発表内容は，感情と運の知覚がギャンブル行動に及ぼす影響に着目したもので，大学生42名を対象とした実験室実験を実施した結果を発表した。分析の結果から，ギャンブル中のある試行で勝った後の方が，負けた後よりも，感情がより快になり，自己の運の知覚が高まり，活性（覚醒）状態も上昇し，後続する選択が相対的により無謀になるということが示された。

発表時間は30分間と短い時間であったが，その間絶え間なく研究者の方々が申請者の発表に訪れ，有意義な議論を行うことができた。日本からの参加者が申請者のみであったためか，特にギャンブル行動の文化比較を専門にされている研究者の方々から多くの質問をいただいた。また，学会運営者の方々の心遣いにより，入り口付近の人通りが非常に多い場所で発表することができた。幸いなことに，申請者の発表が“NCPG's student poster contest”における“Best student poster”賞に選ばれた。申請者にとって，今回が初めての国際学会での発表であったが，今後の研究を継続していく上で，この経験は非常に有意義なものとなった。

2. 他の研究発表

本学会期間中行われた研究発表は，ポスター発表が約20件，口頭発表・ワークショップが約60件であり，日本の学会と比較すると，ポスター発表の割合が少なかったように感じられた。発表内容としては，病的賭博者の患者を対象とした回復プログラムを実践した研究など，どちらかと言えば，「治療」に焦点を当てた研究が多い印象を受けた。

アメリカでは，州によってギャンブルが認められていたり，禁止されていたりいうと差はあるものの，政府が積極的にギャンブル依存の問題を解決するために多くの資金を投資しているという現状がある。この点は，まだギャンブルの研究が進んでいない日本の現状と大きく異なっていると感じられた。また，学会期間中も，スポンサーとなっている企業などのギャンブル依存回復プログラムのキャンペーン用のブースが数多く設けられていた。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　06月　28日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　香港中文大学・訪問研究員

氏　名　石橋　和也

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	The 11th Vision Sciences Society Annual Meeting （第11回視覚科学学会）
公式ホームページURL	http://www.visionsciences.org/index.html
開催期間	2011年　5月　6日　～　2011年　5月　11日
旅行期間	2011年　5月　5日　～　2011年　5月　13日
開催場所 （国・都市・会場） ※現地名綴りおよび日本語表記	Naples Grande Hotel, Naples, Florida, USA （米国，フロリダ，ネイプルス，ネイプルス・グランデ・ホテル）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	石橋和也(香港中文大学・神戸大学) 喜多伸一(神戸大学) Jeremy M. Wolfe (ハーバード大学医学部)
発表題目 ※正式名と日本語訳	An optimal termination strategy for dual-target search （2つの目標が出現する探索場面における最適停止戦略）
補助金額	100,000円（内訳　航空運賃）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は，申請者らの発表に対して国際会議等参加補助金をいただき，心より感謝を申し上げます。以下で，当該学会について，ならびに学会で得られた成果について報告いたします。

● Vision Sciences Society (VSS)

VSS は今年で 11 回目を迎える国際会議で，その対象は視覚科学となっています。VSS には実験心理学の研究者だけでなく，神経生理学，人工知能などの分野の研究者が世界各地（北米，ヨーロッパ諸国，東アジアなど）から参加し，さまざまなトピックに関して熱い議論を交わします。VSS は視覚科学領域の最大規模の会議であり，今年の発表件数は約 1300 件でした(ポスター発表 1100 件，口頭発表 200 件)。学会中は発表以外にもさまざまなイベントが開催されます。代表的なイベントしては，視覚的錯覚（今年は，触覚的錯覚のノミネートもありました）のコンテストである"Best Illusion of the Year Contest"と，学会の「公式」なダンス・パーティーである"Club Vision"が挙げられます。

● 申請者の研究内容

次に，VSS で発表を行った申請者らの研究について紹介します。

現実生活では，われわれは二つ以上の目標を同時に探さなければならないことがあります。例えば，空港の荷物検査では，検査員は異なる種類の目標（銃，ナイフ，爆発物）を同時に探さなければなりません。これらの目標は，目標ごとに特有の出現頻度・難易度を持ちます。これまでの研究は，複数の種類の目標が出現する際の探索終了の意思決定が，どのような規則に基づいて行われるかを明らかにしていませんでした。そこで申請者らは，目標が 2 種類ある探索場面で，われわれがどのような探索終了の意思決定を行うかを調べました。実験では，目標が出現する試行の割合を 50%に設定し，目標が出現する試行では 2 種類の目標のうち 1 つだけを提示しました。また，2 種類の目標の相対的な出現頻度と難易度を操作し，それらの変数が探索終了の意思決定にどのような影響を与えるかを調べました。

申請者らはこれまでの研究で，目標の出現頻度に応じた探索終了時間の変化が，探索戦略の最適化を反映していると仮定したモデルを提案しています。このモデルでは，目標の出現頻度と探索時間から評価関数である「発見効率（単位時間当たりの目標発見個数)」を算出し，その効率が最大となる探索終了時間を予測します。申請者らはこのモデルを用いて，実験から得られた実測値とモデルから得られる予測値を比較しました。その結果，申請者らのモデルは実測値のパターンを良く予測することができました。この結果は，目標が 2 種類ある探索場面では，単純に難易度の高い課題や高頻度の課題で探索終了時間を決定するわけではなく，それらの情報を加味して最適な探索終了時間を選択していることを示唆します。

以上の研究内容について発表・質疑応答を行い，その結果，多数の研究者の方たちと有益な情報交換をすることができました。

● その他

学会期間中は，主にボストン大学の大学院生の方たちと行動し，研究内容だけでなく，お互いの研究生活についても語り合うことができました。学会期間中には，各大学の研究室ごとに「ホーム・パーティー」と称して飲み会が行われることが多いのですが，そのような機会を通じて，共著者である Jeremy Wolfe 先生の研究室のメンバーの方たちと久しぶりに会い，旧交を温めることもできました。今学会では，最新の研究発表を聞けたことだけでなく，上記のように，海外の研究者の方たちと交流できたことも大きな成果でした。

1　この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　　12月　　2日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　筑波大学大学院人間総合科学研究科
博士前期課程1年

氏　　名　　平野　美沙

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	Emotions 2011: Fifth International Conference on The (Non)Expression of Emotions in Health and Disease 感情 2011：健常時と病態における感情の（非）表出に関する第5回国際学会
公式ホームページ URL	www.tilburguniversity.nl/emotions2011
開　催　期　間	2011年 10月 23日　～　2011年 10月 25日
旅　行　期　間	2011年 10月 22日　～　2011年 10月 28日 （旅行期間が申請書よりも1日短くなっている）
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Tilburg University, Tilburg, Netherlands （ティルブルグ大学，ティルブルグ，オランダ）
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	平野　美沙（筑波大学大学院人間総合科学研究科博士前期課程） 湯川　進太郎（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The Impact of Mindfulness Meditation on Anger （マインドフルネス瞑想が怒りに及ぼす影響）
補　助　金　額	100,000 円（内訳　往復航空券をマイルで購入したので，残りを宿泊費・移動費・大会参加費等にあてさせていただきました ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2011年10月23日から10月25日にかけて，オランダのティルブルフで開催された，Emotions 2011: Fifth International Conference on The (Non)Expression of Emotions in Health and Disease において，ポスター発表を行った。申請者の発表日時は10月23日の16:30~17:30であり，発表題目は“The Impact of Mindfulness Meditation on Anger（日本語題目：マインドフルネス瞑想が怒りに及ぼす影響）”であった。本学会は，感情表出や感情制御に関する国際学会である。比較的小規模な学会であるが，キーノートスピーカーとしてなど，感情表出・抑制に関する研究領域において有名な研究者も多数参加しており，とても刺激的な話を聴くことができた。また，発表の場だけではなく，コーヒーブレイク等の休憩時間にも，研究テーマの類似している研究者の方々と，自身の研究について密接に議論することができた。

【成果】

1．自身の研究発表

申請者の発表内容は，マインドフルネス瞑想が怒りの感情に及ぼす影響について検討したものである。大学生68名を対象とし，実際に1週間，毎日マインドフルネス瞑想を行う群と行わない群の比較を通して，その効果を検討した研究結果を発表した。分析の結果から，マインドフルネス瞑想を継続的に行った群のみにおいて，怒りの体験を反すうする傾向が低減することが示された。また，マインドフルネス瞑想を行う群において，毎回瞑想の前後にその時に気分を評定するよう求めたところ，ほぼすべての参加日において，瞑想前から瞑想後にかけて，快気分が増加しており，一時的なマインドフルネス瞑想により気分が改善される可能性が示唆された。

発表時間は1時間であったが，その間に多くの研究者の方々が発表に訪れ，有意義な議論を行うことができた。国外において，申請者の発表した研究について意見をいただき，議論を交わすという体験が初めてであったため，とても新鮮かつ刺激的であった。また，発表中の会話の中で，申請者の発表した内容であるマインドフルネスに関する発表や論文の情報を得ることもできた。

2．他の研究発表

本学会期間中行われた研究発表は，キーノートレクチャー5件，ワークショップ5件，シンポジウム12件，ペーパーセッション9件，ポスター約40件であった。発表内容としては，感情の表出や抑制に関する基礎的研究から，介入的研究まで様々であった。

国外における研究動向を知ることができたことはもちろん刺激的であったが，なによりも圧倒されたことは，口頭発表中の質疑応答の時間であった。国内の学会と比べて，オーディエンスの参加量が非常に多く，発表中であっても疑問に思ったことがあれば挙手して議論を交わす場面は印象的であった。言語だけではなく，積極性も，世界に通用する研究者となるうえで重要な要素なのだということを感じた。今回の国際学会では，その場の雰囲気に慣れることで精一杯であったが，次回参加する際は，自分も質疑応答の場に積極的に参加したいと思う。

【最後に】

この度は，申請者の発表に対し，国際会議等参加旅費補助金をいただきまして，心より感謝申し上げます。今回の国際学会から得た成果を，今後の研究に生かしてゆく所存です。ありがとうございました。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　7月　20日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職　名　慶應義塾大学　非常勤講師

氏　　名　　日根　恭子

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The 12TH European Congress of Psychology 第12回ヨーロッパ心理学会
公式ホームページURL	http://www.ecp2011.org/
開　催　期　間	2011年　7月　4日　～　2011年　7月　8日
旅　行　期　間	2011年　7月　3日　～　2011年　7月　9日
開　催　場　所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	開催場所（現地名）Istanbul, TURIKEY 会場 The Istanbul Convention & Exhibition Centre 開催場所（日本語表記）イスタンブール、トルコ スタンブールコンベンション&展示センター
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	日根　恭子（慶應義塾大学）・伊東　裕司（慶應義塾大学）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The influence of personality judgment on configural processing in facial memory 顔の記憶の関係処理におけるパーソナリティ判断の影響
補　助　金　額	100,000円（内訳　　航空券代　　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2011年7月4日から8日に開催されたThe 12TH European Congress of Psychologyにおいて，参加およびポスター発表を行った．本会議で扱うトピックは，多岐に渡っていた．また本会議には，ヨーロッパに加え，アジアなど他の地域の研究者も多く参加していた．以下，学会での活動と成果を報告する．

【活動】
報告者の発表日時は，7日16:30～18:30であり，発表セクションは"Learning and Memory"であった．同時刻の他の発表セクションは，"Disaster and Trauma Psychology", "Developmental Processes", "Interdisciplinary Issues", "Language, Reading and Communication"であった．在籍責任時間は30分であったが，報告者は2時間在籍した．
訪問者は，期待していたほど多くはなかった．この理由として，報告者の発表日時がポスター発表としては会期を通じて最後のセッションであったこと，時刻がやや遅かったことが挙げられる．一方で，ひとりひとりの研究者と，じっくりと議論を重ねることができた．

【成果】
報告者の発表は記憶に関するものであったが，これまでに参加した会議に比べ，記憶を専門とする研究者よりも，他のトピックを専門とする認知心理学研究者の訪問が多かった．従って，報告者の研究のバックグラウンドに関する質問やコメントが，他の学会発表よりも多く感じられた．訪問者の専門領域により自身の研究についての説明方法を工夫する必要があったが，この点に関して今後改善をしていく必要を感じた．
報告者が発表した研究に関して，投稿に適した雑誌などのコメントも頂くことができた．また当日は欠席していたが，報告者と類似の研究を行っている研究者を紹介していただくことができた．このような方と今後議論させていただくことで，報告者の研究が進むことが期待される．
また，10部程度の発表ポスターのハンドアウトは，すぐに足りなくなってしまった．その場で質問やコメントを頂けない場合でも，ハンドアウトが必要な方がいらっしゃったので，次回はより多くのハンドアウトを用意したいと思う．

報告者の研究に関する事以外にも，普段の研究生活について話をさせていただくことができた．報告者の発表には，日本以外の研究者に訪問していただいたが，他国の研究者を取り巻く環境に関して話を伺うことができ，興味深かった．また，現在は直接関係のある研究を行っていないが，今後一緒に研究する可能性などもお話させていただいた．このように，他国の心理学研究者との人脈を増やすことができたことは，今後の研究に大いに役立つことが期待できる．これからも本会議で知り合った研究者と連絡を取り，最先端の研究と知識を取り入れていきたいと思う．

他の研究者の発表について，報告者の研究テーマと異なる発表を多く伺うことができ，知識の幅を広げることができた．また研究内容以外にも，発表内容やポスターの作り方など，参考にすることのできる発表も多くあった．これらは，今後の報告者の発表の参考にしていきたい．

第12回ヨーロッパ心理学会参加への助成をしていただき，ありがとうございました．

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　10月　29日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　北海道医療大学大学院
心理科学研究科博士前期課程
氏　　名　新　川　広　樹　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine （第21回世界心身医学会議）
公式ホームページURL	http://www.icpm2011.org/
開　催　期　間	2011年　8月　25日　～　2011年　8月　28日
旅　行　期　間	2011年　8月　24日　～　2011年　8月　29日
開　催　場　所 （国・都市・会場） ※現地名綴りおよび 日本語表記	National Museum of Korea, Seoul, Korea （韓国，ソウル，韓国国立博物館）
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	新川広樹[1]・富家直明[2]・村椿智彦[3]・田山　淳[4]・ 金澤潤一郎[1]・濱口豊太[5]・福土　審[3]・坂野雄二[2] [1] 北海道医療大学大学院心理科学研究科，[2] 北海道医療大学心理科学部， [3] 東北大学大学院医学系研究科行動医学分野，[4] 長崎大学保健・医療推進センター， [5] 埼玉県立大学保健医療福祉学部
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The effect of irrational dieting beliefs on abnormal eating behavior and obesity in Japanese university students （ダイエットに関する不合理な信念が食行動異常と肥満に与える影響）
補　助　金　額	50,000円 （内訳　札幌―ソウル間の航空券代55,350円の一部として）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動内容】

2011年8月24日から28日かけて，韓国のソウルにてThe 21st World Congress on Psychosomatic Medicine（第21回世界心身医学会議）が開催され，報告者は“The effect of irrational dieting beliefs on abnormal eating behavior and obesity in Japanese university students（ダイエットに関する不合理な信念が食行動異常と肥満に与える影響）”という演題でポスター発表を行った。

本大会では“New Vision for Psychosomatic Medicine: Beyond Science and Borders”をテーマとして，心身医療に携わるさまざまな職域の研究者が世界各地から集い，睡眠障害，摂食障害，肥満，慢性疼痛，慢性疲労症候群，過敏性腸症候群，アレキシサイミアなど幅広い分野にわたって活発な議論がなされた。また，そういった心身症に対するアプローチとして，脳機能画像を用いたニューロイメージング，ノックアウトマウスを用いた薬理作用モデル，双生児研究による遺伝子要因の検討といったメカニズム解明に関する研究が多彩であった。中でも“Epigenetic（後成遺伝学）”というキーワードが頻繁にみられ，心身症の病態理解への新たな可能性を感じることができた。

治療技法に関しても，認知行動療法，問題解決療法，動機づけ面接，ストレスマネジメント，マインドフルネス認知療法など，さまざまな心理療法の実践例を学ぶことができた。特に，本大会はアジアでの開催ということもあり，漢方やヨガといった東洋医学的治療を用いた研究も豊富であった。こうした東洋医学的治療は，西洋医学との比較よりも“Integrative Medicine（統合医療）”として双方の長所を活かした治療を行うことを目的としており，アートの世界に留まるのではなく，サイエンスとしてエビデンスを蓄積していくことが課題として挙げられていた。

国際会議ならではの大規模な研究が多くみられ，多職種連携で心身医療を捉えることの重要性をあらためて感じさせられる学会であった。

【成果】

報告者の発表は，1日目の13：30～17：30に行われた。同セッションでは肥満，食行動異常，慢性疼痛，アレキシサイミアに関する心理社会的なモデルなどの研究発表がなされていた。在席時間中には多くの参加者が訪れ，貴重な意見をいただいた。

発表内容は“ダイエットに関する不合理な信念”という概念を測定する尺度を開発し，それが食行動異常を介して肥満に影響を与えるというモデルを検討したものであった。同じ領域で研究活動をしている参加者とも議論でき，食行動を定量的に測定する尺度の不足や，肥満研究と摂食障害研究の弁別に関する問題意識は，国が違えども共通していることを確認することができた。また，日本の参加者からは，尺度が公刊されたら是非使わせてほしいなどといった励ましの言葉をいただき，大変勇気づけられた。

報告者にとっては自身初の国際学会での発表であったため，英語でのディスカッションは緊張したが，どの参加者も親切に受け答えして下さり，英語に対する恐怖心は少しばかり克服された。

【付記】

この度は，世界心身医学会議への参加にあたりまして，日本心理学会より助成を賜ったことを厚く御礼申し上げます。大学院生にとって，このような経済的援助は大変有り難く，研究に対するモチベーションを向上させるものであったように思います。ご支援を無にしないよう，今回の経験を今後の研究活動に活かして参りたいと思っております。このような機会を与えてくださった日本心理学会および関係者の皆様に心より感謝を申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　8月　3日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京大学大学院教育学研究科
教育心理学コース　修士課程

氏　　名　　小野田　亮介

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	Sixth Self Biennial International Conference 第6回「SELF」国際学会
公式ホームページURL	http://www.self.fse.ulaval.ca/
開催期間	2011年　6月　19日　～　2011年　6月　22日
旅行期間	2011年　6月　18日　～　2011年　6月　23日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Country: Canada/ City: Quebec City/ Venues: Laval University 国：カナダ，都市：ケベック，会場：ラヴァル大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	小野田亮介（東京大学大学院教育学研究科） 利根川明子（東京学芸大学大学院教育学研究科） 上淵　寿（東京学芸大学）
発表題目 ※正式名と日本語訳	"Who" or "What" do affect the contents of Reaction-Paper? : From the stand point of Bakhtin's theory 宛名と目的のどちらがリアクション・ペーパーの記述内容を規定するか：バフチン理論の視座から
補助金額	100,000円（内訳　航空運賃）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2011年6月19日から22日に開催されたSixth Self Biennial International Conference（第6回「SELF」国際学会）において，“Who” or “What” do affect the contents of Reaction-Paper? : From the stand point of Bakhtin’s theory（宛名と目的のどちらがリアクション・ペーパーの記述内容を規定するか：バフチン理論の視座から）という題目でポスター発表を行った。

【成果】

1. ポスターセッション

私の発表は大会2日目の“Motivation”というセッションに割り当てられた。学会側が規定していたサイズ（横長のA0版）でポスターを作成していたのだが，実際に割り振られたスペースはそれよりも随分と狭く，当初会場では若干の混乱がみられた。結局，予定されていたスペースから移り予備の板にポスターを張り発表を行った。

本学会では，大学の一斉講義型授業において利用されるリアクション・ペーパー（授業終了前に教員が学生に配布し，授業の感想や疑問について記させるツール）の記述内容と，バフチンの概念である「宛名」の関係について発表した。動機づけ研究の文脈ではバフチンの理論が引き合いに出されることは少なく，学会参加者に興味を持っていただけるか不安であったが，Motivationのセッションがにぎわっていたこともあり，海外の多くの研究者に自分の発表を見ていただくことができた。この点は，本学会に参加した一番の収穫だと言えるだろう。ただし，悔やまれる点は自分の英語力が拙いばかりに十分なやり取りができなかったことである。英会話力の向上が今後の課題として強く意識された。

2. 他の研究発表

本学会は「SELF」という名称であるが，参加者の多くが動機づけの研究者であり，基調講演においても1日目にJacquelynne Eccles, 2日目にEdward L. DeciとAndrew J. Elliot, 3日目にMark R. LearyとReinhard Pekrun，最終日にRobert J. Vallerandと，Herbert W. Marshと，第一線で活躍する研究者の発表を聞くことができた。彼らの発表はいずれも分かりやすくユーモアにあふれており，「聴衆をひきつけ楽しませながら自身の主張を伝えていく」ということも研究者に求められるスキルなのだと強く感じた。当然のことながら，その内容も興味深いものであり，最前線にいる研究者がどのようなことに興味を持ち，どのような方向を見据えているかについて知ることができた。これらの経験も学会に参加して得ることのできた大きな収穫の一つであり，今後自身の研究内容に大きく影響を及ぼすものになると感じている。以上のように，本学会への参加は私にとって非常に有意義な経験であった。

【付記】

この度は，国際学会等参加旅費補助金の対象研究として採択していただきまして，日本心理学会，および学会関係者の皆さまに，心より感謝申し上げます。修士課程でありながら国際学会に出席し，最新の知見と一流の研究者たちに触れることができたことは，私にとって非常に有意義な経験となりました。今回の経験を自身の研究に生かし，より一層研究に邁進していきたいと考えております。本当にありがとうございました。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　8月　30日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名
長崎大学保健・医療推進センター
技術職員（臨床心理士）
氏　名　西　郷　達　雄　㊞

□
下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	The 21st World Congress on Psychosomatic Medicine 第21回世界心身医学会議
公式ホームページURL	http://www.icpm2011.org/
開催期間	2011年　8月　25日　～　2011年　8月　28日
旅行期間	2011年　8月　24日　～　2011年　8月　29日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	Korea, Seoul, National Museum of Korea （韓国、ソウル、韓国国立中央博物館）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	西郷達雄（長崎大学），田山　淳（長崎大学），山崎　浩則（長崎大学），小川さやか（長崎大学），富家直明（北海道医療大学），村椿智彦（東北大学），新川広樹（北海道医療大学），濱口豊太（埼玉県立大学），玉井慎美（長崎大学），林田雅希（長崎大学），坂野雄二（北海道医療大学），福土　審（東北大学），調　漸（長崎大学）．
発表題目 ※正式名と日本語訳	Development of the eating behavior scale for college students. （大学生版食行動調査票の開発）
補助金額	50,000円 （内訳　長崎～ソウル間の航空運賃 65,080円の一部　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【活動報告】

2011年度日本心理学会国際会議等旅費補助金により、2011年8月24日から8月28日に開催されたThe 21st World Congress on Psychosomatic Medicine（第21回世界心身医学会議）において、“Development of the eating behavior scale for college students.” という題目でポスター発表を行った。本研究は、食行動調査票大学生版の開発と信頼性・妥当性の検証を行ったものである。演題発表後は、他の研究による講演やシンポジウム、ポスター発表に参加し、最新の知識や情報を得ることができた。

【本研究の成果】

本研究は、日本の大学生版食行動調査票の開発についての研究である。食行動と肥満の関連は先行研究では多く指摘されており、経済が発展しつつあるアジアの国々の研究者に大変強い興味・関心を持って聞いていただくことができ、30部ほどのハンドアウトがすぐに無くなってしまった。特に、中国や韓国においても低年齢の児童の肥満が問題に取り上げられており、今後の研究に役立てることができるというご意見を頂いた。また、この大学生版食行動調査表の妥当性の部分について、スクリーニングされた学生が将来的に肥満になるかどうかの予測的妥当性の観点からの研究が必要であるというコメントをいただくことができた。

【その他の成果】

心身医学がテーマであることから、医学的な知識も必要であった。心と身体の関連において、特に神経内分泌学や神経免疫学などの知識をより学ばなければならないと痛感した。今後は、心理面だけでなく、医学的な知識も学び、全人的な医療をサポートできる臨床心理士になるよう研鑽を続けなければならないと考えた。以下にアブストラクトを掲載する。

Title: Development of the Eating Behavior Scale for college students.
Aim : The Eating Behavior Scale (EBS) is widely used in Japan to assess obesity-specific eating behavior. However, no such scale exists specifically for college students. Therefore, we developed the EBS for College Students (EBS-CS). This study evaluated the factor structure, reliability, and validity of EBS-CS.
Method:Participants consisted of 1600 college students, who were surveyed using the original 30-items EBS for general populations (sub categories: feeling of satiety, substitute eating and drinking, meal content, cognition of constitution, eating style, sense of hunger, eating behavior, and eating rhythm abnormalities). Results were analyzed item response theory (IRT). This analysis revealed the discriminatory power of items in each subcategory. Data for people defined as obese (BMI≧25) were then compared with original EBS and EBS-CS score using ROC analysis.
Results: Based on IRT analysis, two items from each subcategory were selected for inclusion in the EBS-CS, resulting in a 14-items scale. A strong correlation at the 95% CI was observed between original EBS and EBS-CS scores. There was significant correlation between EBS-CS total score, body mass index, and waist circumference. AUC for EBS-CS total score was 72% for males, and 63% for females, while the AUC for the original EBS total score was 65% for males, 56% for females.
Conclusions: EBS-CS demonstrated good reliability and validity as a measure of obesity-specific eating behavior for college students.

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2012　年　1　月　30　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　筑波大学大学院人間総合科学研究科
心理学専攻１年
氏　　名　　兪　　善英　（ユ　ソニョン）㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	International Society for Traumatic Stress Studies (ISTSS) 国際トラウマティックストレス学会
公式ホームページ URL	http://www.istss.org//AM/Template.cfm?Section=Home1
開　催　期　間	2011 年 11 月　3 日　～　2011 年 11 月 5 日
旅　行　期　間	2011 年 11 月　1 日　～　2011 年 11 月 6 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Baltimore Marriott Waterfront Hotel, Baltimore, Maryland, USA アメリカマリランド州ボルチモア、ボルチモアマリオットホテル
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	Seonyoung Yoo[1], Miho Hatanaka[2], Yutaka Matsui[1]（[1]Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, [2]Meijo University) 兪　善英（ユ　ソニョン）[1]・畑中美穂[2]・松井豊[1] （[1]筑波大学大学院　人間総合科学研究科・[2]名城大学　人間学部）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	traumatic stress of Japanese volunteer firefighters 日本の消防団員における外傷性ストレス
補　助　金　額	100,000 円（内訳　　航空券代 116,300 円　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【概略】

2011年11月3日～11月5日にアメリカ・ボルティモアーで開催された第27回国際トラウマティックストレス学会年次大会に参加し、研究成果の発表のみならず世界中のトラウマ研究の動向を把握できた。本大会で特に印象に残っているプログラムは「internship and postdoctoral program networking fair（トラウマを専門としている学生にインターンシップやトレーニングなどの機会を与えるため、病院などのトラウマ研究機関の代表者が参加し、学生にキャリア一相談や所属機関のプログラムを紹介）」や「student meeting with leaders in the field（実践・研究を問わずトラウマ分野の有名な専門家がトラウマ専門の学生と昼食を一緒にしながら自由に話すプログラム）」、「special interest groups（SIG、細分化されたトラウマ研究・実践分野ごとに興味を持っている人々が集まって自由に意見を交換するプログラム）」、「pre-meeting institute(PMI、大会前日一日もしくは半日間、各分野の専門家の指導下で大会プログラムと関わるテーマについてトレーニングを受けるプログラム）」など、学生と専門家もしくは参加者間のネットワーク作りに役立つプログラムも充実しており、研究発表や発表参観に留まらず、学会員が積極的に参加できるプログラムの企画によりトラウマ研究の活性化を導けるような様々な工夫がされていると感じられた。本学会大会での参加は初めてであったが、トラウマ分野では最も大きい国際学会だけあり、世界中のトラウマ研究者や実践家が集まる大規模の大会だったため、著名な各国の研究者と議論できる機会が多く、大変有意義な経験となった。

【活動報告・成果】

本大会の発表形式は、シンポジウムやワークショップ、ポスター発表、パネル発表、事例発表、メディア発表（動画、ドラマ、音楽など、トラウマに関わるメディア媒体を用いた発表）などがあり、その中でもポスター発表は大会期間の3日間、毎日100件弱（計300件程度）の発表が行われ、発表者のみならず参観者も多く、活発な議論が行われていた。筆者は大会最終日の11月5日17時から18時まで「日本の消防団員における外傷性ストレス」に関するポスター発表を行った。1997年阪神淡路大震災以降、救援者集団の惨事ストレスに関する研究が多くなされており、その対策も行われているが、ボランティアとして消防活動をサポートする消防団員のメンタルヘルスに関する研究は少なかったため、日本の消防団員の外傷性ストレスの実態及びその規定因に関する調査結果を発表した。本発表について国内外の参加者から興味を持っていただき、更なる検討点や今後の展開に関する意見交換ができ、モチベーションが高まるようないい刺激となった。また、自らの発表だけでなく、上記のPMIやSIGプログラム、シンポジウムなどに積極的に参加し、トラウマに関する心理学的介入や脳神経科学的研究の最前線に触れながら、自らの研究について幅広く、また一層深く考えるようになった。

【付記】

国際トラウマティックストレス学会年次大会への参加にあたり、多大なご支援をして下さった日本心理学会、学会関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011　年　7　月　29　　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻
博士後期課程　大学院生

氏　　名　　砂谷有里

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	6th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology 第６回　子どもと青少年の精神病理学国際会議
公式ホームページ URL	http://www.roehampton.ac.uk/childandadolescentpsychopathology/index.html
開　催　期　間	2011 年 7 月 11 日～2011 年 7 月 12 日
旅　行　期　間	2011 年 7 月 9 日～2011 年 7 月 14 日 当該学会に参加する前に、トルコ共和国イスタンブールで 7 月 4 日から 8 日の日程で開催された、第 12 回ヨーロッパ心理学会議に参加しました。申請時には、一度日本に帰国して、当該学会に行く予定でしたが、航空券空席状況と費用の関係上、帰国せず直接当該学会に行くこととしました。9 日にイスタンブールからロンドンに移動した(当該学会前日の 10 日は、イスタンブール→ロンドンの航空券が倍ほど高額であったため 9 日にしました)　ため、上記の旅行期間となっています。
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	United Kingdom, London, Roehampton University 英国　ロンドン　ローハムプトン大学
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	砂谷有里 明治学院大学大学院　社会学研究科　博士後期課程
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Consequence of self-harm behaviour by opening the “Self-harm Website Narrative analyses of the Japanese self-harmers who opened the “Self-harm Website 自傷サイト開設による自傷行為への影響――日本人自傷サイト開設者の語りの分析――
補　助　金　額	100,0000 内訳　（ロンドン→成田間の航空券・大会参加費の一部として ） 申請金額が、180,000 円でしたが、実際の助成金額が 100,000 円であったため、ロンドン→成田の航空券と、大会参加費の一部にあてさせて頂きました。そのため内訳項目が申請時と異なっております。ご了承ください。

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

イギリス国ロンドン市の市内中心部から電車とバスを乗り継ぎ30分くらいのところに位置するRoehampton Universityで2011年7月11日から12日の期間で開催された「6th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology第6回　子どもと青少年の精神病理学国際会議」において、「Consequence of self-harm behaviour by opening the "Self-harm Website Narrative analyses of the Japanese self-harmers who opened the "Self-harm Website.　自傷サイト開設による自傷行為への影響――日本人自傷サイト開設者の語りの分析――」という主題で発表を行った。発表形式はポスター発表、発表時間は、2011年7月11日16時15分から45分であった。

ヨーロッパ心理学会など、参加者が1000人単位となる大規模な学会での発表経験はあったが、このような参加者が100人ほどの小規模な学会での発表は初めての経験であった。こうした小規模な学会では、他の研究者との密な関わりをもつ時間が確保されていた。

私自身が与えられたポスター発表の持ち時間は30分であったが、その時間には口頭発表は設定されていなかったということもあってか、限られた時間の中で参加者の多くがポスター発表の部屋に足を運んでくださった。同様の、あるいは近接した主題を研究している世界各国の研究者（小規模な学会ということもあり、イギリスおよびベルギーやアイルランドなど近隣からの参加者が多かったが、日本を含めアジア圏、あるいはイランなどの中東の研究者の発表も少なからずいた。）と意見をやりとりすることができたのは、とても良い経験であった。

ポスターは、発表持ち時間だけでなく、学会開催期間の2日間、終日掲示することが許可されていたため、1日目に学会会場に到着してすぐに貼り、2日目の終了時間まで貼り出しておいた。また、ハンドアウトと名刺もポスターの下に置いておいた。それにより、発表持ち時間外にポスターを見てくださった他の研究者と、昼食や休憩の時間に討論することができたこともよかった。1日目の夜には学会が主催したバーベキューにも参加し、屋外のリラックスした雰囲気の中で、研究や研究生活の話をすることができた。

孤独な作業になりがちな大学院博士後期課程において、国内だけでなく国外の研究者とこうしてネットワークを構築することは、大変意義あることだと感じる。

「子どもと青少年の精神病理学国際会議」での発表は、私の研究生活の中でかけがえのない経験となった。その機会を与えて下さった日本心理学会、学会関係者の皆様に心からお礼申し上げます。発表への助成をしていただき、本当にありがとうございました。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　8月　24日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　早稲田大学大学院　人間科学研究科
博士後期課程
氏　　名　野村　和孝

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	3rd Asian Cognitive Behavior Therapy Conference （第3回アジア認知行動療法会議）
公式ホームページURL	http://www.3rd-acbtc.org/index.html
開催期間	2011年 7月 14日 ～ 2011年 7月 16日
旅行期間	2011年 7月 13日 ～ 2011年 7月 17日 （航空券の確保のため、帰着日を申請より1日延期した）
開催場所 （国・都市・会場） ※現地名綴りおよび日本語表記	Korea・Seoul・Catholic University （韓国・ソウル・カトリック大学）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	野村　和孝　早稲田大学大学院人間科学研究科 東本　愛香　千葉大学精神保健研究教育センター 小畠　秀悟　国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科 嶋田　洋徳　早稲田大学人間科学学術院
発表題目 ※正式名と日本語訳	Influence of sex offender treatment program on sex offenders in Japan：An exploratory study 日本における性犯罪者治療プログラムが性犯罪者に及ぼす影響：実験的検討
補助金額	50,000円（内訳　大会参加費および航空券代として　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、申請者の発表に対し、国際会議等参加旅費補助金をいただきまして、心より感謝申し上げます。以下に、当該会議での活動報告、ならびにその成果を報告させていただきます。

【活動報告】

申請者は、ソウル市において開催された第３回アジア認知行動療法会議への参加、およびポスター発表を行った。会議では、性犯罪における認知行動療法をテーマとしたシンポジウムへの参加をはじめとして、アジア地域における認知行動療法の動向や最新の研究に触れ、海外の研究者との交流を深めるとともに最新の知見の収集に努めた。ポスター発表では、“Influence of sex offender treatment program on sex offenders in Japan：An exploratory study”を発表し、日本の民間施設において実施した性犯罪者の治療プログラムの効果と今後の展望について報告を行った。発表では、海外の研究者との意見交換を行い、性犯罪者処遇制度における日本と海外の相違点について確認するとともに、性犯罪者の治療プログラムのあり方について議論した。

【成　果】

性犯罪者の再犯防止を目的とした認知行動療法は、カナダやイギリスを中心にプログラムの開発や効果検討が行われ、多くの知見が積み重ねられている。一方で、アジア地域での取り組みは、法務省矯正局・保護局（2005）の報告にみられる通り、認知行動療法に基づくプログラムが導入されてからまだ間もない。第３回アジア認知行動療法会議では、アジア地域における性犯罪者の再犯防止を目的とした認知行動療法のあり方についての情報を収集し、意見交換を交わすことが目的であった。申請者は、シンポジウムに参加し、ポスター発表を行う中で、制度上の限界点、プログラムの課題について情報の収集と意見交換を行うことができた。

まず、「制度上の限界点」は、社会内、つまり刑務所等の矯正施設外での治療において、治療動機の低い者をいかに継続的な治療にのせていくかということについて、海外の研究者と意見交換を行った。申請者が行ったポスター発表の研究内容は、民間施設における性犯罪者の治療プログラムの効果検討であり、参加者は自発的に治療を希望する者であった。自発的に治療を希望する者は、「やめたくてもやめられない」といった主訴を持つ、いわゆる依存症タイプの者であり、治療に対し法的強制力を必ずしも必要としない者であった。海外の研究者は、自ら治療を希望する者がいることに驚きを示し、参加者の状態像について興味を示す姿が見られた。その一方で、性犯罪者の治療においては、治療動機が低い者が少なくないことから、比較的長期間にわたる治療の継続を可能とする制度上の仕組みの必要性について海外の研究者からコメントがあり、アジア地域における共通の課題として制度上の限界点があることが示唆された。

次に、「プログラムの課題」は、性犯罪者の共感性に対するアプローチの実践上の工夫、認知行動療法プログラムの実施上の注意点についての議論が交された。共感性に対するアプローチについては、Cortoni & Marshall（2001）の指摘にもある通り、被害者の反応に対する直面化は、さらなる性犯罪のきっかけとなる可能性があり、共感性に対するアプローチを実施する場合には適切なコーピングの形成を同時に行う必要があるということについて議論が交わされた。また、認知行動療法プログラムの実施上の注意点については、「認知の修正」にこだわるなどの特定のアプローチに固執するのではなく、学習理論に基づく機能分析と情報処理理論に基づく認知的側面への多面的なアプローチを実施、検討していくことが重要であるとの意見交換がなされた。

これらの情報収集や議論を通して、アジア地域における性犯罪者の再犯防止を目的とした認知行動療法は、制度上の仕組みやプログラム内容の検討を積み重ねることが重要な課題であることを確認することができた。日本が抱える課題が、アジア地域において共通の課題であることを確認できたのは非常に有意義であり、また、申請者の研究テーマである性犯罪者の被害者共感性へのアプローチが共通した課題となっていることの確認ができたのは、自らの研究テーマの意義を再確認する意味でも大きな収穫であった。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011　年　　7月　　22日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東北大学大学院教育学研究科
博士課程後期
氏　　名　　黒澤　泰 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	2011 International Mini-Conference on Personal Relationships ※日本語訳：人間関係に関する国際会議
公式ホームページ URL	http://www.iarrgdansk2011.ug.edu.pl/
開　催　期　間	2011年7月7日　～　2011年7月9日
旅　行　期　間	2011年7月5日　～　2011年7月11日(機中泊。日本着12日)
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Poland・Gdańsk・University of Gdańsk (ポーランド・グダンスク・グダンスク大学)
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	1)黒澤　泰・2)加藤道代 1)東北大学大学院 教育学研究科　博士課程後期 2)東北大学大学院 教育学研究科　准教授
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	正式名：Associations among　relationship-focused coping, marital satisfaction, and well-being in Japanese couples. 日本語訳：日本の夫婦における関係焦点型コーピング、結婚満足度、精神的健康の関係)
補　助　金　額	100000円（内訳　航空券代186900円の一部として）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

大会情報と大会テーマ

2011年7月7日から9日まで、ポーランドのグダンスク大学にて、International Association for Relationship Research 主催の大会が行われました。本学会では、“Relationship development, maintenance, dissolution：関係性の発達、維持、解消”というテーマが設定され、ポスター発表、口頭発表ともに30程度行われました。どちらかというと小規模な学会でしたが、次期アメリカ心理学会、Division7 発達心理学部会会長に就任予定である Gail Goodman 氏、愛着理論の Phillip R. Shaver 氏など著名な研究者の方々が基調講演をされました。また、ポーランド、チェコなどの近隣諸国ばかりではなく、イングランド、アメリカ、台湾などからも学会に参加しており、関係性(Relationship)をテーマに活発な議論が行われていました。

私の発表

私は、夫婦のストレス場面における関係維持に注目した関係焦点型コーピング尺度の3側面(関わる、譲る、離れる)と結婚満足度、精神的健康度との関連についての研究をポスター発表して参りました(Poster No. 14)。積極的な関係維持の頻度が夫と妻で正の相関を示したという結果から、ポジティブな相互作用を示唆できた点が本研究のオリジナリティであったと考えます。フロアからは、研究結果における文化差の存在(海外の先行研究と異なり、関係維持のための我慢や譲歩がネガティブな影響をもたなかった点などに関して)やこの分野に関連する研究者を紹介していただきました。また、ワルシャワ大学の研究者の方から、私たちが作成した関係焦点型コーピング尺度の英訳版の使用を検討したいので、心理統計的な情報をいただきたいという非常にありがたい申し出をいただきました。

世界の潮流

夫婦関係、親子関係、珍しいところでは、コーチとアスリートの関係性などに注目した研究が発表されていました。個人的には、愛着理論に基づいた発表が多かった印象を受けました。Gail, Goodman 氏の基調講演では、性的虐待時における親子関係について話され、親の愛着スタイルによって、子どもの記憶の質が異なってくるという研究が発表されました。また、Actor/Partner Effect を分析の軸に置いた研究も多く、今後の研究において二者の視点を含めた仮説を立て、分析していく必要性を感じました。

学会印象

前述の通り、小規模な大会であったため、参加者の方々と行動を共にすることが多く、密な交流をすることができました。特に、本学会では、1つの時間帯には1つのイベントのみが行われ、5つの基調講演、9つのシンポジウム、ポスターセッションなど、取りこぼしなく参加することができました。また、この度の東日本大震災が日本に及ぼした影響は、海外でも関心事であった模様で、“フクシマはどうなっている？”“地震の影響で、不便なことなどはないか？”などよく聞かれました。

ポーランドの印象

学会開催日の前日には港町であるソポト、学会終了後にはツアーでマルボルク城に観光することができました。会場であったグダンスクは、ポーランド北側の主要都市であり、ドイツ文化を感じる煉瓦造りの美しい町でした。また、ポーランド料理は(量は少し多かったですが)、日本人である私にとっても非常に美味しかったです。また、マルボルク城は第二次世界大戦において破壊された経験を持っているというガイドを聞き、何かを立て直す人の強さを感じました。

おわりに

最後は、各国の参加者の方と「次回大会(シカゴ)でまた会いましょう」という形で、学会を終えることができました。私自身、自分のリスニング能力や英語の能力の至らなさを感じることもあり、専門知識を深めることと英語力を伸ばす必要性を痛感いたしました。最後になりますが、今回の学会発表に関して助成していただきました、日本心理学会、及び関係者の皆様に深く感謝いたします。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

２０１１　年　８　月　３　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　筑波大学保健管理センター・助教

氏　　名　　寺島　瞳　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	International Society for the Study of Individual Differences 2011 国際個人差研究学会 2011
公式ホームページ URL	http://www.issid2011.com/
開　催　期　間	2011 年　7 月 25 日　～　2011 年　7 月　28 日
旅　行　期　間	2011 年　7 月 17 日　～　2011 年　7 月　28 日 （ロンドン大学訪問 7.19、イギリス認知行動療法学会参加 7.20～23 のため）
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	United Kingdom, London, University of London's Institute of Education （イギリス，ロンドン，ロンドン大学教育研究所）
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	寺島　瞳　筑波大学
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	How Narcissists Maintain Their Romantic Partnership or Lose it ? 自己愛者はどのようにパートナーをつなぎとめてそして失うのか
補　助　金　額	100,000 円（内訳　航空券代の一部 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は，その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2011年7月25日～28日にロンドンで開催された2011年度国際個人差研究学会（ISSID2011）に参加した。以下にその概要を報告する。

【申請者の発表】

「How Narcissists Maintain Their Romantic Partnership or Lose it？（自己愛者はどのようにパートナーをつなぎとめてそして失うのか）」という題名でポスター発表を行った。

従来，自己愛者に特徴的な恋愛関係として，特定のパートナーとの関係が短いことが指摘されている。一方で，自己愛者はパートナーをつなぎとめようとする行動は多くとることも明らかとなっている。本研究では，なぜ自己愛者はパートナーをつなぎとめようとしているにも関わらず，パートナーを失うのかについて検討した。その結果，自己愛者がパートナーをつなぎとめようする手法が攻撃的であるため，パートナーを失う結果に至ることが示された。またそこにはパートナーから見捨てられる不安が媒介していた。一方で，見捨てられ不安が媒介しない場合は，自己愛者でも攻撃的でない適応的な手法でパートナーをつなぎとめようとして，パートナーを失わずにすむという結果もみられた。よって，自己愛者が恋愛関係において攻撃的にふるまわずに相手との関係を長く続けるためには，見捨てられ不安に介入することが有効であることが示唆された。

自己愛と恋愛関係に関する研究は海外では多く行われているが国内ではあまり見られない。海外の研究者と交流して，本研究を推進するための示唆を得ることが学会参加の主要な目的であった。

【得られた成果】

ポスター発表会場では参加者にワインが振る舞われた。研究者たちが各々ワインを片手にポスターを見てまわるという日本とはかなり異なるにぎやかな雰囲気の中で行われた。ロンドンで行われた学会であったが，申請者のポスターを見に来て下さった方は，ドイツ，スイス，オランダなど非英語圏のヨーロッパの研究者が多かった。興味深いご指摘を数多くいただいた。特に，同じ分野の研究をしている知り合いがいるからと名前を教えてくださる方が多く，今後につながる有用な交流ができた。さらに，ドイツの若手研究者とのあるやりとりが印象的だったので以下に記す。この結果は英語で論文にしているかとたずねられたので，残念ながらしていませんと答えたところ，日本や中国ではたくさん興味深い研究があるにもかかわらず，英語で書かれたものがあまりないので非常に残念だとおっしゃっていた。自分たちも非英語圏であるため英語で論文を書くことには苦労するが，必ず英語で論文にしてアメリカなどの学会誌に投稿するようにしていると話してくれた。日本での知見を世界に広めていくためにも見習わねばならないと思い，大変よい刺激となった。

【その他の発表】

博士論文でManipulative tactics（操作方略）について研究したが，日本にはこの概念を扱っている研究者がいなかった。本学会では，以前に論文も引用したことがあるクロアチアの研究者がManipulative tacticsについてポスター発表していた。操作を扱う数少ない研究者と交流ができたことは非常に貴重な経験であった。また，学会中いくつかのシンポジウムに参加した。パーソナリティや個人差に対して生理指標，脳画像，遺伝などからアプローチしている内容がかなり多く，日本との違いを感じた。個人的にはDark Triadを提唱したPaulhusの話題提供を聞けたことが収穫であった。その他、正義や衝動性，会社で成功する資質に関してなど，いくつかの興味深いテーマのシンポジウムに参加して，今後の研究の参考になった。

最後に，助成していただきました日本心理学会の皆様に厚く御礼申し上げます。なお，本学会の前にイギリス認知行動療法学会に参加することはお伝えしておりましたが，19日にロンドン大学のStudent Psychological Servicesも訪問したため，若干出発が早まりましたことご報告いたします。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　9月 22 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　名古屋大学大学院環境学研究科
・大学院生

氏　　名　　山田　陽平

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および 日本語訳	5th International Conference on Memory 国際記憶学会第5回大会
公式ホームページURL	http://www.york.ac.uk/conferences/icom5/
開催期間	2011年　7月　31日　～　2011年　8月　5日
旅行期間	2011年　7月　29日　～　2011年　8月　7日 （申請書では8月6日であったが，航空券代の関係上8月7日に変更した）
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	UK, York, The University of York イギリス・ヨーク・ヨーク大学
発表者氏名 ※全員の名前と所属 日本語表記	山田　陽平　名古屋大学大学院環境学研究科 月元　敬　東京大学人文社会研究科 川口　潤　名古屋大学大学院環境学研究科
発表題目 ※正式名と日本語訳	Retrieval-induced forgetting by recognition practice 再認経験による検索誘導性忘却
補助金額	100,000円（内訳　航空券144,170円の一部に充てさせて頂きました　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は，国際会議等参加費補助金をいただき，イギリスのヨーク大学で行われた第5回記憶国際会議（5th International Conference on Memory: 以下ICOMと省略）に参加しました。

（学会の概要）

今大会はヨーロッパでの開催ということもあり，前回のオーストラリアよりも多くの研究者が参加していました。本学会は記憶という一つのテーマで6日間開催され，1日2名のKeynote Speakers（10名）による講演が行われ，シンポジウムおよび口頭発表（約500件），ポスター発表（約250件）という内容で構成されていた。Keynote Speakersは初日のFergus Craik（levels of processing）から最終日のAlan Baddeley（working memory）まで著名な研究者による講演を生で聴くことができました。彼らの発表内容は過去の業績だけにとどまらず，現在進行中の研究を紹介するなど非常にエキサイトするものでした。シンポジウムでは自伝的記憶や作業記憶といった日本でもおなじみのテーマに関する発表が非常に多かったのに加え，memory controlやepisodic future thinkingといった新しい研究テーマに関しても注目が集まっていました。さらには，記憶の神経基盤に関する研究や神経心理学的な研究も多く発表されており，記憶に関する幅広いアプローチとその知見に触れることができました。記憶に関する特定のテーマについて一度に多くの研究を聴くことができるのはICOM以外にはなく，世界のレベルや最先端の研究を知ることができ，大変勉強になりました。

（発表の成果）

私は3日目にポスター発表を行いました。発表の内容は検索誘導性忘却（retrieval-induced forgetting: RIF）が再認によっても生じることを示すとともに，それは，ディストラクタによる手がかり過重負荷ではないこと（ディストラクタがなくてもRIFが生じる），および連合干渉によって生じたものではないこと（再学習ではRIFが生じない）を三つの実験から明らかにし，再認経験による検索誘導性忘却は再認過程における抑制処理によって生じているということを主張しました。また，再認過程における抑制処理の発見はRIFという単一の現象の説明にとどまらず，抑制処理を組み込んだ再認理論という新たな方向性を示す証拠であると考えています。本発表は，この分野のパイオニアであるM. C. Andersonから高い評価をしていただきました。その他にも，B. C. Storm, M. F. Verde，B. J. Levyといったトップレベルの研究者にも興味を持って頂くことができました。

今回の発表はポスターでしたが，ポスター発表の時間に平行したプログラムが無かったため，多くの研究者に発表を聴いて頂くことができました。このようなスタイルはトップレベルの研究者と議論するチャンスを増やすものであり，研究の質を向上させることにつながると考えられます。日本の学会もできる限りこのようなプログラム構成にすれば良いのではないかと思いました。最後になりましたが，今回，補助金を頂きましたこと，心より感謝申し上げます。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2012 年　3 月　25 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関　北海道大学大学院文学研究科
職名　大学院生（博士後期課程）
氏　名　佐藤　剛介　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	13th annual meeting of Society for Personality and Social Psychology （SPSP 第 13 回大会）
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/
開催期間	2012 年　1 月 26 日　～　2012 年　1 月 28 日
旅行期間	2012 年　1 月 25 日　～　2012 年　1 月 30 日
開催場所 （国・都市・会場） ※現地名綴りおよび日本語表記	U.S., San Diego, the stunning harbor-front convention center （米国・サンディエゴ・スタニングハーバーフロント会議場）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	Kosuke Sato [1] & Masaki Yuki [1, 2] （佐藤　剛介 [1]・結城　雅樹 [1, 2]） [1] 北海道大学大学院文学研究科、[2] 北海道大学社会科学実験研究センター
発表題目 ※正式名と日本語訳	High relational mobility causes high self-esteem: A cross-regional analysis in Japan with a socio-ecological approach. 高い関係流動性が高い自尊心を育む：社会生態学的アプローチを用いた日本国内における地域間比較調査
補助金額	100,000 円（内訳　飛行機代）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2012年1月29日に米国、カリフォルニア州サンディエゴで開催された13th annual meeting of Society for Personality and Social Psychologyに参加し、High relational mobility causes high self-esteem: A cross-regional analysis in Japan with a socio-ecological approachという題目でポスター発表をさせて頂きました。この研究は、高関係流動性社会、つまり対人関係の選択肢が多い社会（新たな関係の構築機会、既存の関係からの離脱機会などが多い）では、人々が自己に対する肯定的認知である自尊心を高く持つようになる可能性を検討したものです。先行研究の国際比較調査では、関係流動性および自尊心が米国の方が日本よりも高く、その自尊心の日米差は両社会間の関係流動性の差異によって媒介されることが示されています。そこで本研究では、先行研究の知見が関係流動性の異なる国内の地域間でも示されるかどうかを検討しました。その結果、先行研究と同様に非都市部よりも都市部の方が関係流動性も自尊心も高いことが示され両地域間の自尊心の差異は関係流動性によって媒介されることが示されました。この結果は、社会生態学的要因である関係流動性が高い地域に住む人々の自尊心が高まる可能性を示唆するものです。

ポスターセッションはA～Gと7つのセクションに別れており、本研究はCultureのカテゴリーにおいて発表されました。そこで多数の研究者からコメントや質問を頂きました。本研究に関心を寄せてくださった人々のほとんどが、本研究に対して肯定的な反応であり、近年大きく注目を集める社会生態学アプローチを用い、適応論的観点から自尊心の水準の文化差や地域差の説明を試みる本研究の有用性を海外にも発信できたと思われます。

また、本会に先だって開催されたCultural psychology pre-conferenceも本会も共に、第一級の研究者のいくつもの最新の研究に触れられ、またお互いの研究内容に関して直接のコミュニケーションを持つことができ、非常に有益な学会参加となりました。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年11月25日

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　立命館大学文学部心理学専攻実習助手

氏　　名　　都賀　美有紀

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The Psychonomic Society:　The 52nd Annual Scientific Meeting （心理科学協会：第52回年次科学会議）
公式ホームページURL	http://www.psychonomic.org/annual-meeting.html
開　催　期　間	2011年11月3日　～　2011年11月6日
旅　行　期　間	2011年11月1日　～　2011年 11月8日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	USA, Washington, Seattle, Sheraton Seattle and Washington State Convention Center （アメリカ合衆国ワシントン州シアトル・シェラトンホテルおよびワシントン州会議場）
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	都賀　美有紀（立命館大学文学部）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The Effects of Word Length and Phonological Similarity in an Order Reconstruction Task at Immediate and Delayed Retention Intervals 語長と音韻類似性が学習直後と遅延後の順序の記憶に及ぼす影響：再構成課題を用いた検討
補　助　金　額	100,000円（内訳 往復航空券91,420円全額と宿泊費76,173円の一部）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

日本心理学会国際会議等参加旅費補助金によって助成を受けた学会(The Psychonomic Society が開催する The 52nd Annual Scientific Meeting) についておよび参加・発表の成果を以下に報告する。

● 発表日時およびセッション

2011 年 11 月 4 日（金）18：00～19：30　ポスター発表　（ポスター貼りだしは 16：00～）

● 場所

Washington State Convention Center　6ABC ホール

● 本大会の様子

シンポジウム等の口頭発表が 304 件，ポスター発表が 1037 件あり，どの会場においても活気があって非常に盛大な大会であると感じた。また，本大会と同時期あるいは前後して，様々な学会が同じ会場で開催されており賑やかさを増していたように思う。本大会同様に参加費が無料の大会もあり，例えば OPAM（Workshop in Object Perception, Attention, and Memory）などの他の学会での発表も聞くことができ，有意義であった。

● 国際学会参加・発表の成果

自身の発表に関しては，１時間半の持ち時間の間に 6 人から質問およびコメントがあった。ポスターを閲覧したのみの方も数名おり，活気がある中での発表は刺激的であった。特に，どの点が面白いのかあるいは新しいのかについての質問やコメントが多く，研究発表の際に強調した方がよい点などを再確認させられた。今後の研究の参考になるコメントや励みになるコメントもいただき，非常に有意義であった。質問者数を少ないとは思わなかったが，人だかりができている他のポスター発表も多く，自身の研究の見せ方や十分な議論に足るように英語力を向上させる必要があると感じた。自身の発表について PDF の資料は持参していなかったが，希望者がいたので後日の送付を目的としてメールアドレスの交換を行った。今後の交流につながればうれしく思う。

シンポジウム等に関しては，議論も活発で，興味深く最新の研究に触れることができた。

● その他

国際学会発表の旅費を補助くださいまして，ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011 年 12 月 20 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京大学大学院人文社会系研究科
大学院生（博士課程在籍）
氏　　名　　正田　真利恵　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	9th annual conference object, perception, attention, & memory （第 19 回物体、知覚、注意と記憶ワークショップ）、および、 52nd annual meeting of the psychonomic society（第 52 回基礎心理学会）
公式ホームページ URL	http://www.opam.net/opam2011/index.php , http://www.psychonomic.org/annual-meeting.html
開催期間	2011 年　11 月　3 日　～　2011 年　11 月 6 日
旅行期間	2011 年　11 月　2 日　～　2011 年　11 月 8 日
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	United States of America, Seattle, Sheraton Seattle Hotel （アメリカ合衆国・シアトル・シェラトンシアトルホテル）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	正田真利恵・横澤一彦 （東京大学大学院人文社会系研究科）
発表題目 ※正式名と日本語訳	Semantic similarity does not affect layout learning （意味凝集性は配置学習に影響しない）
補助金額	100,000 円（内訳　航空券）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

①Psychonomics および OPAM の特徴

Psychonomics は、世界的に権威が高いと言われている基礎・認知心理学に関する国際会議の一つである。私は Psychonomics のサテライト会議の一つである OPAM にて研究発表を行った。本会議では Psychonomics の会員ではない若手が中心的に発表を行う。Psychonomics と同様、OPAM は口頭発表とポスター発表から構成されており、発表総件数は 95 件であった。

②研究発表

私は、複数刺激から単一刺激を探す視覚探索課題遂行中に生じる配置学習に対して、刺激の意味情報が影響するかという内容でポスター発表を行った。1 時間という短い発表時間であったが、有意義な議論ができた。加えて Psychonomics にて、私自身の研究関心と近い方々と議論する機会にも恵まれた。

③その他

両会議ともに、ポスター発表と口頭発表のセッションが被らないよう工夫されていたため、興味がある発表をほぼ全て聞くことができた。また新しい研究分野の提言もあったが、その発表が粛々と進んでいく様に驚いた。両会議ともに魅力的で構成が分かりやすい発表が多く、そのような発表・研究ができる研究者になりたいと強く思った。本会議に参加することで、最先端の研究を知るだけでなく、自身の動機付けを高めることができ、充実した 1 週間となった。

最後に本会議で発表を行うために援助してくださった日本心理学会と、会員の皆様に深く御礼を申し上げます。この会議で得たヒントをもとに、より良い研究・発表を行うことができるように日々努力いたします。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　11月　4日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　大阪大学人間科学研究科・特任研究員

氏　　名　松下戦具 ㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	34th European Conference on Visual Perception (ECVP 2011) （第34回ヨーロッパ視知覚学会）
公式ホームページURL	http://www.ecvp2011.org/ecvp/index.php
開催期間	2011年　8月　28日　～　2011年　9月　1日
旅行期間	2011年　8月　27日　～　2011年　9月　1日
開催場所 (国・都市・会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	France, Toulouse, Centre des Congrès Pierre Baudis （フランス，トゥールーズ，ピエールボーディス会議場）
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	松下戦具（ヨーク大学；カナダ　*発表当時） Hiroshi Ono（ヨーク大学；カナダ）
発表題目 ※正式名と日本語訳	The lower and upper thresholds specified by the disparity (equivalent) gradient for depth and motion perception induced by observer-produced parallax (観察者生成運動視差の視差勾配で説明される奥行きと運動知覚の上・下閾)
補助金額	100,000円

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

会議の概要

今回報告者が参加した国際会議，34th European Conference on Visual Perception (ECVP 2011)（第34回ヨーロッパ視知覚学会）はフランスのトゥールーズで開催された．ECVPは，ヨーロッパの他にもアメリカやアジアなどからの参加者も多く，日本人の視覚研究者にもよく知られている国際会議である．この会議の規模は中規模であるが（ECVP2001のウェブページによると登録参加者数は800程度のようである），研究対象が共通（視覚）であるため，興味深い研究を見つけたり意義深いコメントを得られやすい．

本会議で様々な研究者と情報交換をする中で受けた主観的な印象は，日本で行われている研究も国際的に引けを取らないが，研究者の層の厚さ，研究体制，研究者のネットワークの大きさに違いがあるのではないかと，ということであった．

報告者の発表について

今回の会議では申請者はポスター発表を行った．発表内容は運動視差による奥行き知覚に関するものであった．

視差と奥行き知覚に関して，両眼視差の研究者から有意義な意見が得られた．また，本研究で提示した刺激は二つの光点であったが，その研究結果はどのように実際場面（複雑な構造の空間）へ適用されうるのか，といった内容に関しても議論を行った．

今回の発表内容には，刺激がある一定の範囲に布置されている時には運度視差から奥行き知覚が生じない，という内容が含まれていた．この不生起の条件とその意味に関しても議論し，知覚処理の経済性に由来するのではないかという考えが得られた．

運動視差および奥行き知覚は報告者にとって新しい研究トピックであったため，ここで発表することは非常に良い情報収集になった．

その他

国際会議参加後，報告者の所属先が変更になった．そのため，本報告書1ページ目の先頭部分の署名欄と発表者氏名の欄とでは所属機関名が異なっている．

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2012年　2月20日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名
大阪商業大学 JGSS 研究センター・PD 研究員

氏　名　柴田 由己

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会議名称 ※正式名称および日本語訳	The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology （人格・社会心理学会（SPSP）第13回大会）
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/
開催期間	2012年 1月 26 日 ～ 2012年 1月 28 日
旅行期間	2012年 1月 25 日 ～ 2012年 1月 29 日 ※申請時は出発を 26 日としていたが、航空機の都合上 25 日に変更した
開催場所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび日本語表記	The United State of America・San Diego, CA・San Diego convention center アメリカ合衆国・カリフォルニア州サンディエゴ・ ・サンディエゴコンベンションセンター
発表者氏名 ※全員の名前と所属日本語表記	柴田　由己（大阪商業大学 JGSS 研究センター）
発表題目 ※正式名と日本語訳	The effects of delay-discounting, sensation-seeking, and peer group on drinking in adolescents 時間割引、刺激希求、仲間集団が青年期の飲酒に与える影響
補助金額	100,000 円（内訳　往復航空券と宿泊費の一部） ※167,111 円で申請したが、旅行日程の変更とそれに伴うホテル変更により実額は 138,498 円であった

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

貴学会の国際会議旅費補助金を受け、2012 年 1 月 26 日～1 月 28 日に開催された、The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology（人格・社会心理学会 第 13 回大会）に参加した。報告者は、1 月 27 日の午前 8：30～10：00 までのセッションにおいて、ポスター発表を行った。報告者の発表タイトルは「The effects of delay-discounting, sensation-seeking, and peer group on drinking in adolescents」であり、大学生の飲酒の規定因の男女差に関する研究について報告を行った。

報告者が行った発表では、大学生の飲酒メカニズムの性差について、self-control、刺激希求、仲間規範の相互関係からの解明を試みた。先行研究から予測された媒介モデルについて、多母集団同時分析を行った結果、男女いずれについても、刺激希求が飲酒に与える影響は仲間規範に媒介されるが、self-control には媒介されないことが認められた。また、この媒介モデルにおいて、self-control、刺激希求、仲間規範が飲酒に与える影響の大きさは男女で異なることが明らかになった。

以上の発表について、15 名程度の参加者から質問を受けた。それらは使用した測度に関するものが多く、特に、媒介効果が認められた刺激希求と仲間規範の関係について多くの質問があった。また、本発表を通じて、刺激希求を専門に研究している高名な研究者と意見交換をする機会を得た。彼からの質問や助言を直接頂いたことは、刺激希求を専門に研究する報告者にとって大変有り難いものであった。また、帰国後には、e-mail を用いたやり取りにおいて、今回発表した研究への助言を頂くことができた。海外で発表を行ったことで、海外の研究者とのつながりを作ることができたことは、今回の発表で得た貴重な成果のひとつであろう。

さらに、今回の大会参加では、自身の報告以外にも、多くのシンポジウムや他のポスター発表セッションに参加することができた。今回の大会では、self-control に関するポスター発表、衝動性と関連するテストステロンなどの生理指標や、self-control が関連する食欲などの健康行動についてのシンポジウムが多く行われており、アメリカでの self-control 研究の動向を捉えることができた点も有意義であった。

以上のように、貴学会の補助金を受けて大会に参加した意義は大きく、自身の今後の研究の発展に資する貴重な経験を得ることができました。このような貴重な機会を与えてくださいました貴学会に、深く感謝申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2012 年 2 月 15 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　久留米大学高次脳疾患研究所・助教

氏　　名　　岡村尚昌

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	The Second International Conference of Indigenous and Cultural Psychology 第 2 回固有文化心理学国際会議
公式ホームページ URL	http://icicp2011.unud.ac.id/
開　催　期　間	2011 年 12 月 21 日　～ 2011 年 12 月 23 日
旅　行　期　間	2011 年 12 月 19 日～　2011 年 12 月 25 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Universitas Udayana, Denpasar, Bali, Indonesia （インドネシア・デンパサール、バリ・ウダヤナ大学）
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	岡村尚昌（久留米大学高次脳疾患研究所）、津田　彰（久留米大学文学部心理学科）、矢島潤平（別府大学文学部人間関係学科）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	The association between sleeping time and Psychobiological Stress Responses Induced by Mental Stress Testing メンタルストレス・テストによる心理生物学的ストレス反応と睡眠時間との関連性
補　助　金　額	50,000 円（内訳　　宿泊費　　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度、日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助金」を得て、インドネシア、バリ島で開催された The Second International Conference of Indigenous and Cultural Psychology の招聘シンポジウムの企画者、発表者として参加する機会を得ることができましたことを、感謝申し上げます。以下、補助金の使用状況、学会参加について報告させていただきます。

1　補助金の使用に関する報告

補助を受けた 50,000 円は、バリ島での宿泊費（53,152 円）として全額使用した（領収書添付）。申請時は主に航空券代に使用する予定で 109,485 円を申請したが、補助をいただいた金額に合わせて全額を宿泊代に充てた為、内訳が申請書と報告書で異なっている。

2　学会参加と発表に関する報告

・学会参加について

2010 年にインドネシアのジョグジャカルタで開催された第 1 回大会に続いての本学会の参加であるが、International Conference of Indigenous and Cultural Psychology（固有文化心理学国際会議）という学会名のとおり、日本や西欧の心理学とは違った、いわゆるアジア各国の独特な文化、宗教が絡んだアジア独自の心理学にふれることができた。様々な講演やシンポジウムへの参加や、ポスター会場で多くの研究者との意見交換を通して、改めて社会経済的地位や宗教、文化、生活様式などの心理社会的要因の違いを考慮した国際比較の難しさを感じたと同時に、日本を含めたアジア独自の心理学に魅力を感じた。バイオマーカーを用いた健康心理学研究に従事するものとして、非常に興味深いものであった。

・招聘シンポジウムについて

我々の招聘シンポジウム「Bio-Psycho-Social Research on Stress and Health in daily life: Experimental and interventional studies in Japan」は、大会 2 日目の 12 月 22 日午後（14:00～16:00）に行われた。申請者は「The association between sleeping time and Psychobiological Stress Responses Induced by Mental Stress Testing」のタイトルで 3 人目の話題提供者として発表した。予想よりも多くの研究者や学生に参加していただき、申請者の発表に対しても多くの質問があった。アジア各国でも睡眠に関心を持った研究者が多く存在するにもかかわらず、あまり睡眠研究が盛んに行われていないこと、また、本学会の領域においては、我々が行っているバイオマーカーを用いたストレス研究や健康心理学的研究がほとんど行われてないことがディスカッションされ、アジアにおける「ストレスの生理心理学的アプローチ」の今後の発展を期待させるものであった。

以上、申請者にとって刺激的な学会参加であり、国際会議ということで不慣れな英語での発表やコミュニケーションであったが、アジア各国で活躍されている研究者とディスカッションや情報交換することができ大変有意義であった。さらに、研究発表に対して多くの研究者から関心をもっていただき、申請者らが行っている研究の重要性と意義を再認識した。

最後に、The Second International Conference of Indigenous and Cultural Psychology の参加に対して補助をしていただきまして、心より感謝申し上げます。

1　この報告書は帰国後 2 ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011年　11月　5日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　目白大学・非常勤講師

氏　　名　　堀　恭子

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	THE 12th EUROPEAN CONGRESS OF PSYCHOLOGY ヨーロッパ心理学会 第12回大会
公式ホームページURL	http:/ecp2011.org/
開　催　期　間	2011年 7 月 4 日 ～ 2011年 7月 8日
旅　行　期　間	2011年 7 月 5 日 ～ 2011年 7月 8日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Turkey- Istanbul –Convention& Exhibition Centre(ICEC) トルコ・イスタンブール・国際会議場
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	堀　恭子（目白大学）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Understanding the difficulties in caring for people with dementia by reflecting about care activities 省察的実践からみた認知症介護の困難性理解
補　助　金　額	100,000円（内訳　渡航費の一部 ）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

【補助金の使用状況に関する報告】

補助を受けた100,000円は、成田⇔イスタンブール往復航空運賃（150,000円）の一部に充当した。

【参加会議における活動報告】

1. 参加した会議及び発表について

2011年7月4日から8日の5日間、トルコ　イスタンブール市において開催された第12回ヨーロッパ心理学会（THE 12th EUROPEAN CONGRESS OF PSYCHOLOGY）に参加、ポスター発表を行った。発表日時は7月6日14：00~16：00、発表題目は“Understanding the difficulties in caring for people with dementia by reflecting about care activities”（省察的実践からみた認知症介護の困難性理解）であった。本発表は、2011年3月横浜国立大学大学院環境情報学府に提出された博士論文の主要部分についてまとめたもので、認知症高齢者を介護する介護職員の心的状況と実際の介護について介護職員のインタビューと参与観察から得られたデータを質的に分析、D. A. Schönの省察的実践の理論に沿って考察を加えたものである。大会では、発表ポスターへの質問者やその他のポスター発表者等様々な参加者との意見交換を行った。

2．成果

今回の会議は3回目の国際会議参加であったが、1回目の国際会議でのポスター発表参加はe-poster　という対面でない発表形式であり、2回目の国際会議では口頭発表で質疑応答も行われたものの時間が短かく十分な討議が行われずに終了した。これらの会議参加に比べて、このたびの参加は2時間のポスター発表であったため充分な対面交流の機会を得ることができた。また、2回目の国際会議ではアジア特に主催国の韓国の研究者が大半を占めており、研究テーマである「認知症介護」研究については日本の方が先進国の立場であったが、このたびは介護研究では先進国である国々が多い欧州において、研究者と意見交換ができたことは今後の研究の励みとなった。

ノルウェーの研究者との意見交換では、介護分野での先進国と考えていた北欧においても、認知症介護の問題は日本国内と同様の困難性が指摘され、発表研究と同様の問題が実感されているものの解決の糸口も見出せていないとの話を聞いて、先進諸国の成果を参考にしつつも、国内における状況を把握する地道な調査や研究を続けていくことにも大きな意味があることが実感された。

また、ヨーロッパが旧主国である東南アジアの国々からの参加者も比較的多く、日頃接することの多い中国、韓国など近隣諸国とは違った観点からの発表があり、交流を持つことが出来たのもよい経験となった。さらに、日本からの参加者もあり、国内の所属学会では心理学ではあってもあまり交流することがない専門分野の邦人研究者と交流ができたことも大きな成果といえよう。

【付記】

このたび、補助金という形で国際学会参加および発表を援助していただきましたことを心より感謝申し上げます。国際学会の参加は国内学会とは違った視野の広がりと交流をもたらしてくれます。このたびの援助を受け、新たな示唆を得ることができ、今後の研究の励みとなりました。ありがとうございました。

1　この報告書は帰国後2ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011　年　11　月　25　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京学芸大学大学院　教育学研究科・学校心理専攻

氏　　名　　利根川　明子　㊞

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	Sixth Self Biennial International Conference 第 6 回国際 SELF 学会
公式ホームページ URL	http://www.self.fse.ulaval.ca/
開　催　期　間	2011 年　6 月　19 日　～　2011 年　6 月　22 日
旅　行　期　間	2011 年　6 月　18 日　～　2011 年　6 月　24 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Laval University, Quebec City, Canada カナダ，ケベック市，ラヴァル大学
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	利根川明子（東京学芸大学），小野田亮介（東京大学），上淵寿（東京学芸大学）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	How emotion traits associate with stress copings and mental health? 情動特性とストレスコーピング及び精神健康の関連
補　助　金　額	100,000 円（内訳　航空券及び宿泊代金 190,840 円の一部として　）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合(旅行期間や発表題目の変更など)は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

この度は、日本心理学会より「国際会議等参加旅費補助金」を得て、2011年6月19日～2011年6月22日にカナダ・ケベック市で開催された第6回国際SELF学会に参加する機会を得ましたことを心より感謝申し上げます。以下、本補助金の使用状況、発表、及び参加の状況について報告させていただきます。

１．補助金の使用状況に関する報告

補助を受けた100,000円は、東京⇔ケベック間の航空券及び宿泊代金190,840円（領収書添付）の一部として全額使用した。

２．発表の状況に関する報告

発表は2011年6月22日（12：15～14：00）のPoster Presentation（セクションタイトル“Self general”）において行われた。報告者は“How emotion traits associate with stress copings and mental health?”というタイトルでポスター発表を行った。今回の発表内容は、情動特性のスタイルによってストレスコーピングの選択及び精神健康度にどのような違いが見られるか検討を行うというものであった。

セッション時間には、主に海外の若手研究者との質疑応答が活発に行われた。報告者にとって、同年代の研究者と議論を交わせたことは非常に実り多い体験であった。いただいたご意見については今後の研究に活かしていきたい。また、こちらの英語の表現が不慣れなために、十分なコミュニケーションがとれない場面もあったため、英語での表現力については今後の課題としたいと思う。

３．参加の状況に関する報告

会期中は、主に本学会の立ち上げに携わった研究者たちが登壇するKeynote presentationを中心に聴講した。また、いくつかのPaper presentations及びPoster Presentationに参加し、発表者との交流を行った。

特に、会期中のKeynote presentationには全て参加し、Jacquelynne Eccles 博士やEdward L. Deci博士、Andrew J. Elliot博士をはじめ日本でも多くの研究が引用されている先駆的な研究者たちの発表を直に聞く機会を得た。中でもReinhard Pekrun博士の教授学習場面における情動についての発表は非常に興味深く、報告者の今後の研究の参考となる内容であった。Pekrun博士の研究は、教室における教授学習活動を考える際、そこで生じる情動に着目するものであり、これまでの博士の膨大な研究データに基づいて発表がなされた。全体として、Keynote presentationは各発表者のこれまでの研究のレビュー及び彼らが基盤とする理論の解説が主たる内容であった。いずれの発表者も既に広く知られる理論の提唱者であるが、直接発表を聞いたことで、よりそれぞれの研究の理解が深まったように思う。

また、Poster Presentationでは、報告者と同様コーピングスタイルの個人差について取り上げていた研究発表に対して質問を行い、議論を交わした。発表者は若手の女性研究者であり、同一テーマを研究する者同士交流を図れたことを嬉しく思った。これ以外にも若手研究者の発表のなかに興味深い研究が数多くあった。特に海外の若手研究者の研究は、今回のような国際学会の場に赴いて初めて知る場合もある。本学会への参加を含め、国際学会への参加により各領域の最新の研究知見に触れられることは研究者として非常に意義あることであると感じる。誰もが知る研究者から今後を担う若い研究者まで、広く出会い直接交流する機会を得たことに感謝したい。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2011 年　　11 月　　18 日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　東京学芸大学大学院　教育学研究科・大学院生

氏　　名　　山　田　琴　乃　　㊞

□

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ※正式名称および 日本語訳	Sixth Self Biennial International Conference 第 6 回国際 SELF 学会
公式ホームページ URL	http://www.self.fse.ulaval.ca/
開　催　期　間	2011 年　6 月　19 日　～　2011 年　6 月　22 日
旅　行　期　間	2011 年　6 月　18 日　～　2011 年　6 月　24 日
開　催　場　所 (国･都市･会場) ※現地名綴りおよび 日本語表記	Laval University, Quebec City, Canada カナダ，ケベック市，ラヴァル大学
発　表　者　氏　名 ※全員の名前と所属 日本語表記	山田琴乃（東京学芸大学），藤井勉（学習院大学），上淵寿（東京学芸大学）
発　表　題　目 ※正式名と日本語訳	Is performance-approach goal truly adaptive? －Relationship between achievement goals and assumed-competence－ 遂行接近目標は本当に適応的なのか？～達成目標と仮想的有能感の関連～
補　助　金　額	100,000　円　（内訳　航空運賃及び宿泊代金の一部として）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

カナダ・ケベック市で開催された第6回国際SELF学会（Sixth Self Biennial International Conference）に参加し，ポスター形式による研究発表を行いました。以下のとおり，参加・発表を行ったのでご報告いたします。

大会の様子　自己（self）学会という限られた領域を対象とした大会であったため規模は小さめであったが，様々なサービスが用意されており，とても居心地の良いものだった。個人的には，昼食でラヴァル大学の学食を無料で食べることができ，日本とは違った海外の大学の雰囲気を味合うことができたのが嬉しかった。研究発表の様子は，全体的にあまり広すぎないスペースを使用しており発表者と傍聴者との距離が近く，とても聴きやすい雰囲気だった。当日，事前に指定されていたポスターサイズと実際の区画が異なるというアクシデントもあったが，全体としては自己（self）に関して研究している世界各国の研究者が集まり，フレンドリーに議論を交わし様々なアドバイスをいただくことができ，とても有意義な大会であった。

研究発表の内容　達成目標理論における遂行接近目標は適応的だとする知見が多いが（e.g., Urdan, 1997; Pintrich, 2000），遂行目標はネガティブな下方比較とも関連すると言われている。この背景から，申請者はネガティブな不適応指標として仮想的有能感に注目し，仮想的有能感と達成目標との関連を検討した。　日本の大学生を対象にして質問紙調査を行った結果，仮想的有能感は遂行接近目標と正の相関を有していることが明らかになった。このことから，遂行接近目標は必ずしも適応的であるわけではないということが示され，自尊感情の維持といった個人内においては適応的であると考えることができるが，他者と関わるような社会的文脈においては不適応的である可能性が示唆された。

最後になりましたが，この度，国際学会への参加旅費を補助してくださった日本心理学会へ心より感謝申し上げます。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。

国際会議等参加旅費補助金報告書

2012　年　2　月　20　日
（西暦で記入のこと）

日本心理学会理事長　殿

所属機関・職名　上智大学大学院　総合人間科学研究科

氏　　名　　石井　辰典

下記のとおり国際会議参加旅費補助金の使用報告をいたします。

会　議　名　称 ＊正式名称および 日本語訳	The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology （性格・社会心理学会第 13 回大会）
公式ホームページ URL	http://www.spspmeeting.org/
開　催　期　間	2012 年　1 月　26 日　～　2012 年　1 月　28 日
旅　行　期　間	2012 年　1 月　25 日　～　2012 年　2 月　2 日 ＊申請書では 1 月 29 日までとしたが、変更
開　催　場　所 (国･都市･会場) ＊現地名綴りおよび 日本語表記	都市・国：San Diego, California , USA （アメリカ合衆国、カルフォニア州、サンディエゴ） 会場：San Diego Convention Center （サンディエゴ・コンベンションセンター）
発　表　者　氏　名 ＊全員の名前と所属 日本語表記	石井辰典（上智大学大学院総合人間科学研究科） 竹澤正哲（上智大学総合人間科学部）
発　表　題　目 ＊正式名と日本語訳	Computational model of social judgment: Does self knowledge really influence the response time in trait judgment of others? （社会的判断の計算論モデル：「自己」は本当に他者の特性判断の反応時間に影響するのか?）
補　助　金　額	100,000 円 （内訳　東京・成田～アメリカ・サンディエゴ間の往復航空運賃の一部として使用）

1　会議プログラムの発表者氏名・題目が記載されたページのコピーを添付して下さい。

2　申請書に記した事項とこの報告書で事項に相違のある場合（旅行期間や発表題目の変更など）は、その旨を該当事項欄に明記して下さい。

国際会議等参加報告書

2012 年 1 月 26 日～28 日にサンディエゴ・コンベンションセンターで開催された第 13 回 SPSP (Society for Personality and Social Psychology) 年次大会にて、"Computational Model of Social Judgment: Does self knowledge really Influence the response time in trait judgment of others?" と題するポスター発表を行った。

1. 発表概要

あなたの母親は「明るい」か―こうした質問に対して、人はどのようにして回答・判断を行うのだろうか？本研究は、このような社会的判断の認知プロセスに関するコンピューター・シミュレーション研究である。

さて、自己に関する情報や他者に関する情報は、記憶においてネットワークの形で表象されており (e.g., Bower & Gilligan, 1982; Linville & Carlston, 1994) 、さらに自己表象と他者表象は密接にリンクを持っているということを示す知見が蓄積されている (e.g., Andersen & Chen, 2002; Aron et al., 1991; Coats et al., 2000; Smith et al., 1999; Smith & Henry, 1996) 。こうしたネットワーク・モデルに基づけば、自己表象と他者表象は記憶において密接にリンクしているために、他者の特性を判断する際に自己の表象も自動的に活性化すると考えられる。そして自己表象の活性化は、他者の特性判断に影響を与えるとされる。「自己表象の干渉効果」と呼ばれる現象は、この影響のために生じるものだと議論されてきた (e.g., Aron & Fraley, 1999; Smith, 2000) 。

これに対し本研究では、一連のコンピューター・シミュレーションを通じて、「自己表象の干渉効果」は、自己表象と他者表象のリンクを全く想定しない、よりシンプルな判断プロセスモデルによって再現が可能であることをデモンストレートしたのである。

自己表象と他者表象のネットワーク・モデルは、親密な対人関係を記述する基礎的なモデルだと考えられている (Chen, Fitzsimons, & Andersen, 2007) 。Inclusion of Other in the Self (IOS) の概念 (Aron et al., 1991) や転移と関係的自己の理論 (Andersen & Chen, 2002) はその典型例である。そして、「自己表象の潜在効果」は、このモデルの有力な妥当性の証拠の 1 つとされてきた。しかしながら、本研究が示すように、この効果は必ずしも自己表象と他者表象のネットワーク・モデルの証拠とは言い切れない。本研究から、このモデルの妥当性は、まだ議論の余地があると指摘できる。

2. 研究者との交流

まず、申請者のポスター発表に対し、複数の海外研究者が意見・コメント・質問を下さった。中には、発表で扱ったモデルは対人関係の分野では有名なモデルであるだけに（それを批判的に検討した本研究に対し）、批判的な意見もいただいた。しかしながら、多くの方が建設的に申請者の発表のメッセージを受け取って下さったようである。こうした研究者の方々とは学会後も連絡を取り合っており、情報交換を続けている。

また、申請者が参加したポスター・セッションやシンポジウムにて、研究関心を共有する多くの研究者と出会い、議論をすることが出来た。その中では、新たな研究計画の着想を得たり、利用できそうな研究パラダイムを教えてもらったりと、有意義な時間を過ごすことが出来た。

1　この報告書は帰国後２ヶ月以内に提出して下さい。